

Lecture “Visualization and Verification of Ulama Network in Southeast Asia: Ijazah and Silsila as Historical Materials”

講演者: Maxim Romanov (ハンブルク大学)

共催:

- 学術変革領域研究(A) 「デジタルヒューマニティーズ的手法によるコネクティビティ分析」(研究代表者:熊倉和歌子 課題番号:20H05830)
- 人間文化研究機構(NIHU)「現代中東地域研究」
- 共同利用・共同研究課題「中東・イスラームの歴史と歴史空間の可視化分析—デジタル化時代の学知の共有をめざして」

本講演は、共同利用・共同研究課題を含む3つのプロジェクトの共催で行われた。講演者であるマキシム・ロマノフ氏は、共同利用・共同研究課題の共同研究者であり、今年度より、ハンブルク大学で開始されたプロジェクト「イスラーム社会の進化(600–1600年):アルゴリズムを用いた社会史研究」(以後、「イスラーム社会の進化」と略記)、およびアーガー・ハン大学で進められている「キターブ・プロジェクト」(「キターブ」とはアラビア語で「本」を意味する語である)を牽引するイスラーム史・人文情報研究者である。

講演においては、それぞれのプロジェクトの目標と2つのプロジェクトがどのように絡み合い進展していくかという展望について述べられた。まず、「イスラーム社会の進化」では、以下に記す3つのケーススタディに焦点を当て、西暦600から1600年までのイスラーム世界の変遷を分析する。

- 1) 主要な民族、宗教、職業グループと、それらがどのように地域社会の発展を形成し、「イスラーム世界 the Islamic World」と呼ぶものに融合していったのか
- 2) 地域大国の興亡、ライバルとの対立、地域社会との交流のパターンを通じた王朝サイクル
- 3) 疫病、飢饉、干ばつ、害虫の発生、地震、気候変動などの環境要因と、それらが地域社会の生活に与えた影響

およそ1千年というタイムスパンを設定することができる理由は、すでに「キターブ・プロジェクト」が7,000タイトルを超えるアラビア語の歴史資料をデジタル・テキスト化し、Open ITI Corpusとして公開していることにある。これらのデジタル・テキストのファイルは、Github上で公開され、誰でも使うことができる(<https://github.com/OpenITI>)。このデジタル・テキストに対し、マークダウン方式でエンコーディングすることにより、一度に大量の情報を処理することが可能となったのである。

講演の中では、実例を見ながらプロジェクトの計画がより詳細な形で紹介された。ただし、現在進行中のプロジェクトであるため、報告での言及は避けて欲しいとの講演者からの要望があったので、ここでは詳細は書かない。

講演の後、ディスカッションの中では、対象とする史料の位置づけについて(スンナ派の

著者がまとめた人名録にはシーア派の人物が収録されないのではないか)、エンコーディング上の処理(人名録における人物特定を機械的に処理するには限界があるのではないか)についてなど、方法に関わる質問が多く寄せられた。また、イスラーム社会に関する情報は、キリスト教徒などの非ムスリムが残した資料に詳細に残されるケースもあるのではないかという質問に対しては、Open ITI Corpus は開かれているので、そのような史料のデジタル・テキストがあれば、誰でもそこにアップロードして公開することが可能であるという回答があり、プロジェクト単位でのみならず、個人ベースでも Open ITI Corpus の発展に貢献できる方針が示された。

本共同利用・共同研究課題においては、現在、「サハーウィー・プロジェクト」という小プロジェクトを立て、Open ITI Corpus に収録される人名録『輝く光』のデジタル・テキストの編集を行っている。今年度には完了し、いよいよ来年度には、実際にエンコーディングを進めていく計画である。その際課題となっていたのは、例えば、同名の人物をどのように別の人物であることを特定するかという問題であったが、結局はそのような部分は人間による確認作業が必須であることが明らかとなった。その際、作業者によって解釈が分かれる案件をどう扱うかについては、今後検討が必要になるであろう。

文責：熊倉 和歌子